県史跡

内堀館西側堀の発掘調査

2006年（平成18年）３月

中野市教育委員会

県史跡

内堀館西側堀の発掘調査

2006年（平成18年）３月

中野市教育委員会

刊行のことば

内堀館跡は、上今井集落の南部、千曲川沿岸の小扇状地上の扇端に位置しています。館跡は現在臼井家の宅地となっていますが、名称のとおり堀が現存し、また土塁もよく残されています。江戸時代後期に飯山街道の本陣として利用されていたこともあって、よく保存されてきたものと思われます。昭和63年５月には旧豊田村の史跡に、平成９年８月には長野県の史跡に指定されています。

このたびは、中野市豊田支所建設課の依頼により、市道南部線道路改良工事に伴う県史跡内堀館跡の発掘調査を、３月17日から３月27日まで実施しました。調査は㈳中野広域シルバー人材センターが県史跡内堀館跡発掘調査団を組織し、中野市教育委員会の指導のもとに進められました。

発掘調査の結果につきましては、本報告書に述べられているとおりです。本調査は、堀の形状及び伝承にある大手門前のはね橋などの存在確認を主眼に行われましたが、調査範囲が極めて狭かったことなどから確認には至りませんでした。しかし、今回の発掘では、珠洲焼片、内耳土器片、中世土師器などの遺物が出土し、内堀館跡の歴史の一端を解き明かす資料が得られました。このように少しずつでも歴史の事実を解明していくことは大切なことと思います。

最後になりましたが、発掘調査とその後に続く整理作業及び報告書の作成にあたられた㈳中野広域シルバー人材センター事務局ならびに調査団の皆様、また調査に際して多大な御配慮と御支援、御指導をいただいた臼井家の皆様に深く感謝申し上げます。

平成18年３月

中野市教育委員会

目　次

序文
中野市教育委員会　教育長

Ⅰ　発掘調査の経過……1
　1　経過……1
　2　調査団の構成……1
　3　調査日誌……1
Ⅱ　遺　跡……2
　1　遺跡……2
　2　地層の状態……4
　3　周辺の方形館跡……4
Ⅲ　遺構と遺物……8
　1　遺構……8
　2　遺物……9
Ⅳ　むすび……10
　1　内堀館に関する文献……10
　2　発掘調査の所見と問題点……10

挿図目次

第1図　内堀館の地形図……2
第2図　内堀館の所在地……3
第3図　地層の状態……5
第4図　方形館跡の分布図……7
第5図　内堀館略測図……8
第6図　出土遺物……9

挿入写真

内堀館大手門……6

写真図版目次

図版1　1、内堀館遠景　2、内堀館近景
図版2　1、北方堀　2、東方堀
図版3　1、西方堀　2、西方土塁
図版4　1、A区地層断面　2、C区地層断面
図版5　1、調査区範囲　2　かわらけ出土状況
図版6　1、発掘風景　2、出土遺物

Ⅰ　発掘調査の経過

1　経過

本調査は市道南部線の道路改良事業に伴うもので、中野市教育委員会が中野市道路河川課の委託を受け、㈳中野広域シルバー人材センターに委託して実施した。道路改良工事は内堀館の西側堀部分で、この部分は県史跡に指定される以前に、半分ほど道路敷になっていた。今回の工事はその道路拡幅で、調査面積は102㎡、そのほとんどが堀の中の調査であった。

発掘調査は堀の形をよく残している北側部分（Ａ区）と、内堀館の出入り口にあたる大手門前の通路部分（Ｂ区）、及びそれより南側の堀が残っていない部分（Ｃ区）に分けて行った。

調査にあたっては、Ａ区では堀の原形を確認することに主眼がおかれた。そのため、土塁から堀にかけての横断面を調査する必要があったが、土塁上の巨樹根を傷めるということで地主の承諾がえられなかった。

Ｂ区では、堀に「跳ね橋」がかかっていたという伝承を受けて、橋の土台を確認することに主眼がおかれた。しかし、この部分は既存道路でかなり破壊されており、工事範囲外の土塁側の試掘をしてみたかったが、地主の承諾はえられなかった。

Ｃ区では土塁は存在するが堀の形跡がないため、その確認に主眼がおかれた。調査範囲は狭く限られていたが、それでも堀の存在が確認された。さらに、土塁下の堀も確認する必要があったが、Ａ区と同様の理由で地主の承諾はえられなかった。

なお、これより南、すなわち内堀館の南側は千曲川の氾濫原に接し、堀は存在しないとされてきた。その確認も必要であったが、道路改良工事の範囲外で、調査の対象とすることはできなかった。

2　調査団の構成

調査責任者　　中野市教育委員会
調査団長　　関　孝一
調査員　　竹田　保夫
調査補助員　　橋内　賢裕　関　武
作業員　　徳竹　徳一、松宮　功、
　　横田　六三郎
事務局　　㈳中野広域シルバー人材センター
相談役　　小林　修一

なお、調査にあたっては次の方々に格別のご協力をいただいた。

内堀館所有者　臼井和久氏、中野市歴史民俗資料館副館長　中島庄一氏、飯山市埋蔵文化財センター係長　望月静雄氏、元長野県埋蔵文化財センター調査員　中島英子氏

3　調査日誌

３月９日㈭　現地において関係者による打ち合わせを行う。団長・調査員・調査団事務局・中野市道路河川課・中野市教育委員会・中野土建㈱が出席。

３月15日㈬　現地において地主臼井和久氏と打ち合わせを行う。団長・調査員・中野市教育委員会が出席。

３月16日㈭　資材を搬入し、Ｃ区から調査を開始する。

３月17日㈮　Ａ・Ｂ区の調査を重機で行う。

３月20日㈪　Ａ区の調査を続行

３月21日㈫　Ａ区の３層から内耳土器片が出土。

３月22日㈬　Ａ区の３層から中世土師器皿が出土。

３月23日㈭　Ｂ区の調査を重機で行う。３ｄ層から内耳土器片が出土。

３月24日㈮　Ｂ区の調査を続行。

３月27日㈪　Ｃ区の調査を重機で行う。

３月28日㈫　Ｃ区の調査を続行。

３月29日㈬　Ｃ区の３ｂ層から珠洲焼片が出土。

３月30日㈭　現況実測を行い、現地作業を終了する。

３月31日～５月２日㈫　整理作業、報告書の執筆・編集。

整理作業で出土遺物の注記はＵＢ05とした。また、本調査報告書の執筆と編集は竹田保夫が行い、関孝一が監修した。

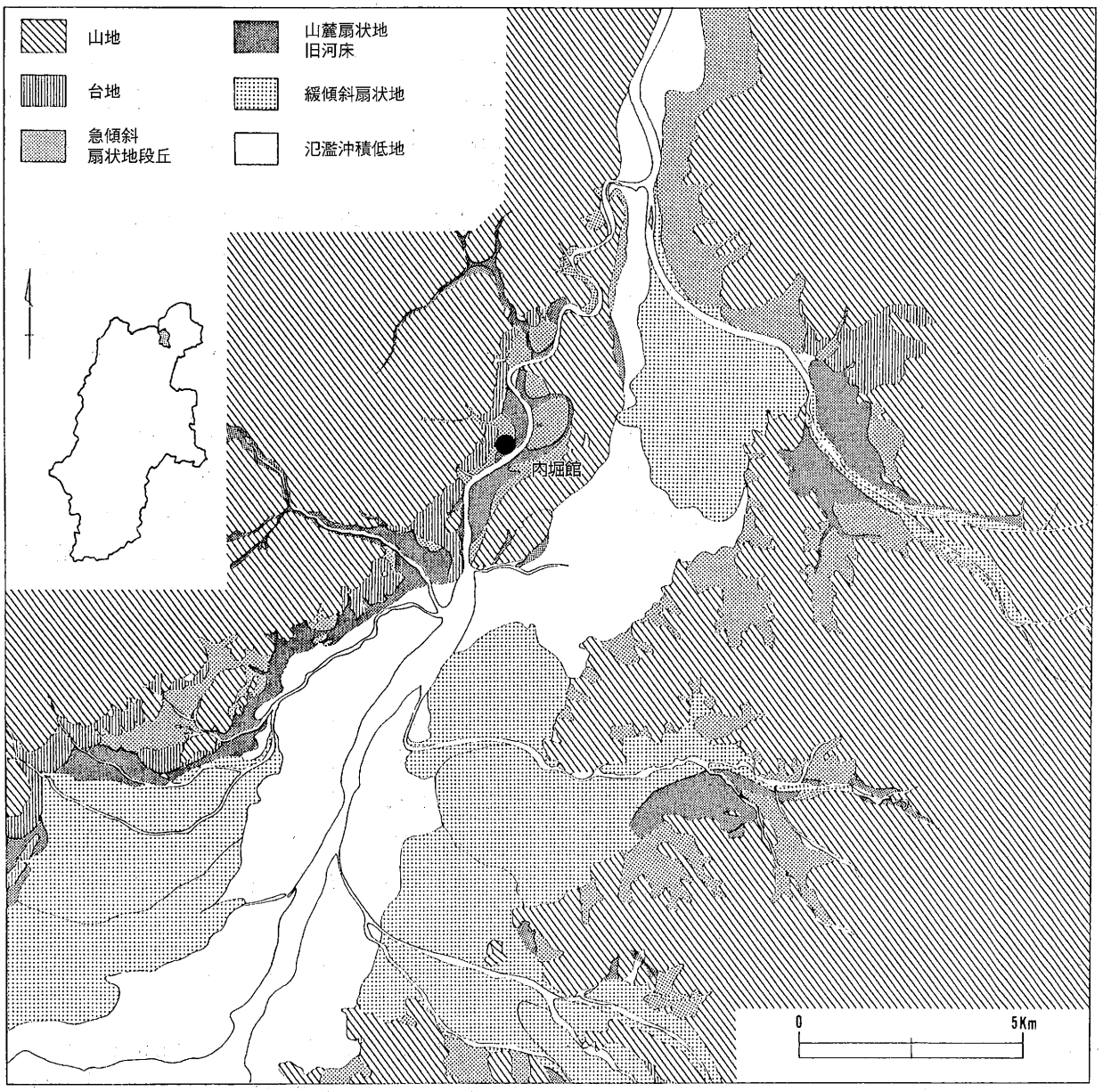
Ⅱ　遺跡

1　遺跡

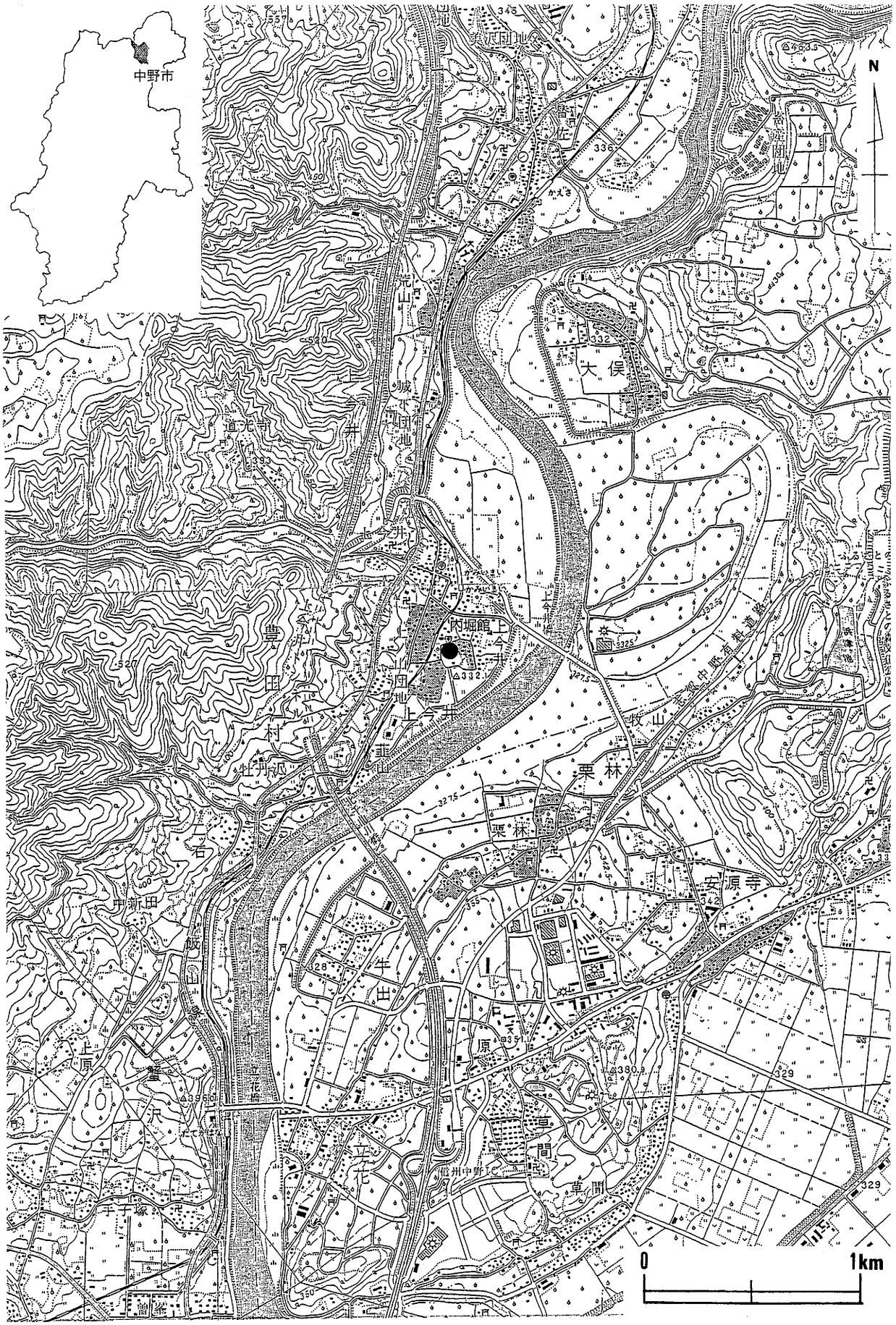
遺跡の内堀館は北緯36°　44′　51″、東経138°　19′　21″、中野市（旧下水内郡豊田村）上今井字南山根663－３に所在する。善光寺平を流下した千曲川は長丘・高丘丘陵と奥手山丘陵の狭間にさしかかるが、内堀館はその２kmほど下流の左岸に建っている。ここは上今井橋に近く、千曲川の右岸は大きく東へ蛇行し、幕末期に瀬替え工事が行われたことで知られている。

内堀館のある左岸は本沢川のかなり急傾斜な扇状地が形成され、館はその扇端部の標高332mに立地している。扇端部は早くから集落が成立する立地条件を有し、内堀館の出現とも深い関わりがあったといえる。とくにこの本沢川扇状地の扇端部は湧水量がきわめて豊富で、堀はこの湧水で満たされていた。

扇端部の先は千曲川の氾濫原となる。千曲川までの距離は300mほどであるが、館の南側に堀が存在しないのは、氾濫原がその役割をしていたといわれる。また、氾濫原は稲作湿田に利用されやすい。内堀館の東側には千曲川の瀬替え工事が行



第１図　内堀館の地形図



第２図　内堀館の所在地

われた大きな蛇行部があり、この広い氾濫原などが内堀館の生産基盤を支えていたのではなかろうか。

2　地層状態

A区の地層（第３図）

調査は幅１ｍ、南北の長さ14ｍの範囲で行い、既設道路沿いに堀の外側壁が確認された。道路沿いの地層状態は１層（表土）・２層（暗褐色土）の下に３層の黒色シルトが層序をなしていた。この黒色シルトは扇状地の堆積土で、堀の中では水成堆積による腐植黒色泥炭層の状態であった。また、この調査区の一部に４層（黄褐色土に黒色シルトが斑に混入）と５層（黄褐色土）の地層がみられた。

B区の地層（第３図）

A区と同様に１・２・３層が層序をなし、その下に３ａ層の暗緑灰色シルトが堆積していた。この層は堀の水成堆積によってできたものと思われる。３ａ層の下は７層の砂質暗黒色土となり、堀の地山と考えられる。

C区の地層（第３図）

調査は幅１ｍ、南北約30ｍの範囲で行った。地層は１・２層の下に３ｂ層（砂質黒色土）が層序をなす。この土層は明らかに水成堆積によるが、こぶし大の礫を含み、黒色土は粘質でないことなど、A・B区の状態とかなり異なっている。その原因は多分堀の形を失い、A区のように水を溜めていなかったという条件的な理由によるものであろう。

さらに興味深いことは、この３ｂ層はB区３層とまったく同一レベルにあることがわかった。それは水を溜めるために堀の底を水平に掘削した結果である。このことはC区に堀が存在していた証左となろう。また、この地区はとくに湧水が多く、３ｂ層の発掘中にトレンチは満水になったほどである。この３ｂ層の下に５層の黄褐色土が続き、これが堀の地山と考えられる。３ｂ層は土塁が終わる付近から西側に方向をとり、８ｍほどでカーブを描いて調査区域外へ消えてしまう。このことから、堀は館の南側まで続いていなかったものと推測される。

3　周辺の方形館跡

中世の館跡は、小布施町から飯山市までの間に約80箇所が確認されている。その多くは交通の要所に点在するが、千曲川より東側の高杜山寄りには、地形的な傾斜面がつづくためか、めぼしい館跡はみられない。

牛出城跡　中野市牛出に所在する。堀は方形状で１辺が約60ｍと推定される。堀は一部で「V」状を呈する。郭内は約3600㎡の面積を有す。

草間城跡　中野市草間堀に所在する。単郭で土塁の高さ２ｍ、東西61ｍ、南北45ｍを有す。

安源寺館跡　中野市安源寺堀脇の高丘丘陵上に所在する。当地方では大きな岡城で、近世平城への移行過程を示す。堀切りに未完成の部分がみられる。方形の土塁を有す単郭で、その規模は68×68ｍを有す。

大久保館跡　中野市草間大久保に所在し、高丘丘陵中央部に所在する。単郭で土塁を有し、その規模は160×100ｍを有す。

壁田城跡　中野市壁田城坂の長丘丘陵上に所在する。飯山方面や長丘丘陵の南方一帯を展望出来る山城である。連郭で空堀を有す。

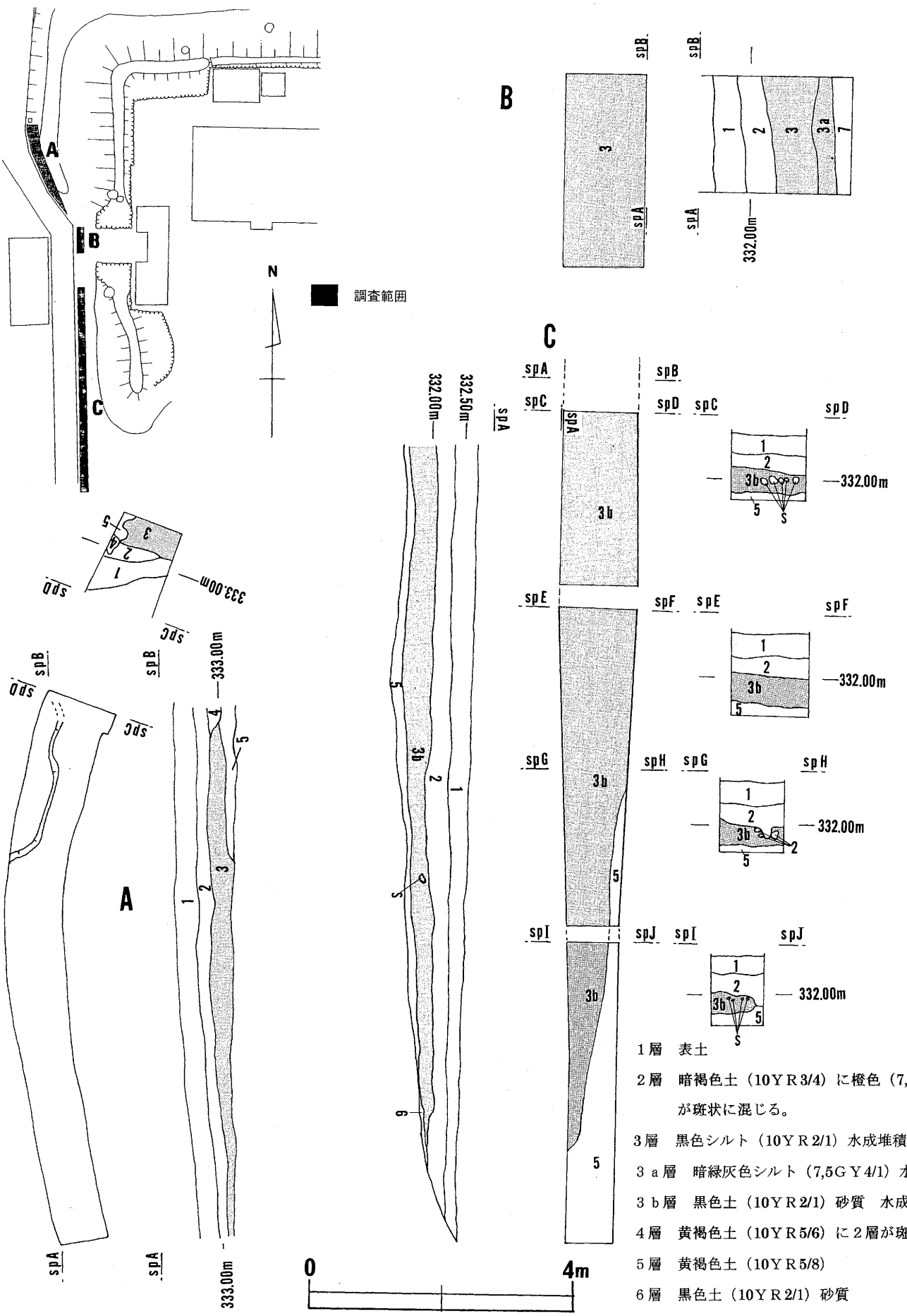
大俣城跡　中野市大俣大林の長丘丘陵上に所在する岡城である。単郭で土塁を有し、その規模は80×70ｍを有す。

立ヶ花城跡　中野市立ヶ花表山に所在する。複郭で空堀、土塁を有す。立地から千曲川を挟んで小布施方面を一望できる岡城である。川中島合戦に甲越の激戦地との伝承がある。

古屋敷（風呂屋敷）中野市上今井に所在する。

東側は千曲川を望む崖で北、西、南の三方向を土塁が巡る単郭である。土塁内側の面積は約2400㎡を有す。

高梨氏館　中野市小館の夜間瀬川扇状地上に所在する。背後に山城の鴨ヶ嶽城をもつ。居館は東西約120ｍ、南北約100ｍの規模を有し、居館の周囲には東西約300ｍ、南北約400ｍの「舘回り」を



1層　表土

2層　暗褐色土（10YR3/4）に橙色（7,5YR6/8）が斑状に混じる。

3層　黒色シルト（10YR2/1）水成堆積層

3a層　暗緑灰色シルト（7,5GY4/1）水成堆積層

3b層　黒色土（10YR2/1）砂質　水成堆積層

4層　黄褐色土（10YR5/6）に2層が斑に入る。

5層　黄褐色土（10YR5/8）

6層　黒色土（10YR2/1）砂質

7層　暗褐色土（10YR3/3）砂質強

第3図　地層の状態

配して外郭を形成している。土塁の内側は東側78m、西側60m、南側と北側が各86mあり、東側が長い形になっている。面積は約6,180㎡を有す。

笠倉館跡　中野市豊津に所在の段丘端に所在する。30×30mを有する単郭である。

小館居館　中野市小館の扇状地中央に所在する。形状は単郭である。

茶臼峯砦　中野市草間茶臼峯に所在の高丘丘陵の中央部に所在する。形状は単郭と思われる。

篠井館跡　中野市三ツ和篠井に所在する。内田氏の居館と考えられ、内田屋敷とも呼ばれている。形状は単郭である。

吉田氏居館跡　中野市吉田立道に所在する。128m×100mを有す。形状は単郭で、高梨氏の被官吉田氏の居館である。

今井南城跡　中野市上今井に所在する山城である。100×80mを有す。形状は単郭で、内堀館の詰め城とも考えられている。

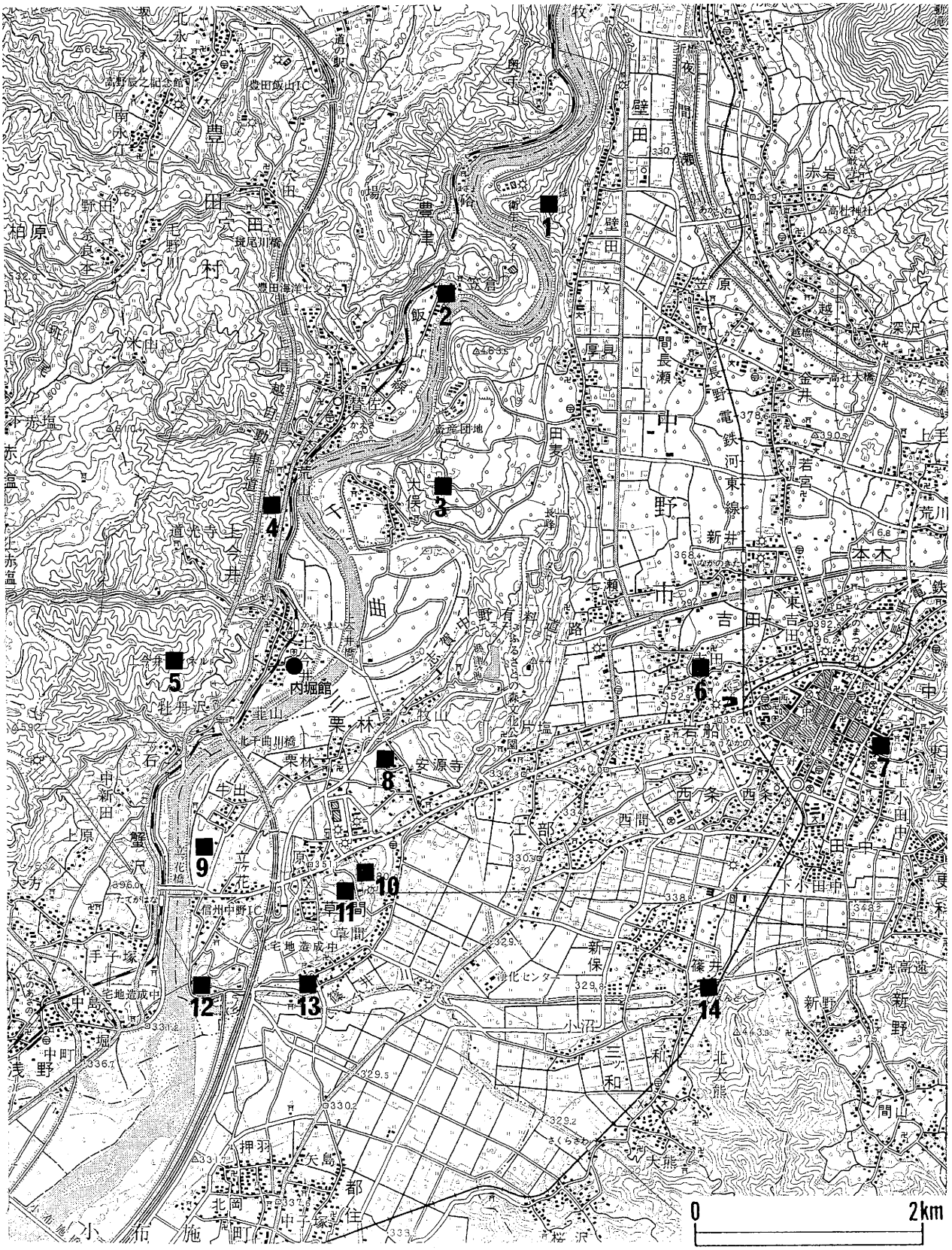
大倉崎館跡　飯山市常盤に所在する。鎌倉時代から室町時代にかけて、この地方の有力な豪族が居城していたと思われる。館は背後に千曲川を控え、外堀の規模は西辺約104m、北辺34m、南辺42mあり幅約10～12m、郭内の面積1600㎡を有す。堀の性格から防禦的色彩が強いが、出土遺物からは士豪層の日常的居館の色彩が強いと思われる。

柏尾館跡　飯山市秋津地区柏尾に所在する。堀は一部現存し、郭内の面積3800㎡を有す。

静間神社館跡　飯山市秋津地区中野に所在する。湧水地の断崖に南接し、南・西・東に幅約7～8mの空堀を「2」字状にめぐらしていると推定される。館跡東隅の堀の形状は「V」字形をなす。郭内の面積は2250㎡を有す。

北畑館跡　飯山市秋津地区北畑に所在する。湧水地の断崖に北接し、北・東・西に2重の堀をめぐらす複濠複郭式構造をとるものと推測される。郭内面積は8100㎡を有す。

内堀館の大手門



1 壁田城跡　2 笠倉館　3 大俣城跡　4 古屋敷　5 今井南城　6 吉田氏居館　大久保館跡　7 高梨氏館跡
8 安源寺館　9 牛出城跡遺跡　10茶臼峯砦　11古屋敷　12立ヶ花城跡　13草間城跡　14篠井館

第４図　方形館跡の分布図

Ⅲ　遺構と遺物

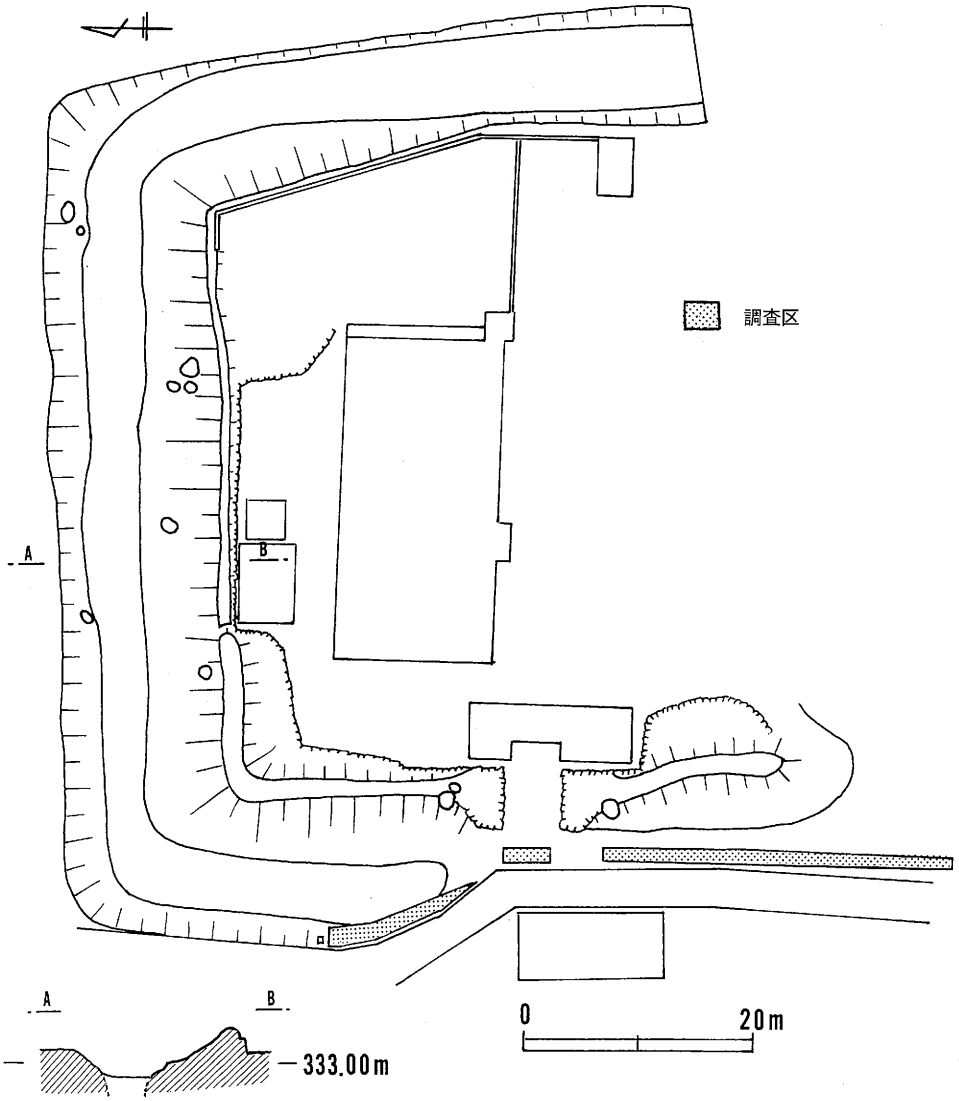
1　遺構

内堀館の遺構は建物と庭園、及び館をめぐる土塁と堀に代表される。全体測量図がないため、今回の調査で測量を計画したが、土塁や堀がかなり荒れており、実施に至らなかった。

ところで、中世頃に築かれたとされる土塁は堀の掘削土を積み上げ、かなり堅牢に作られている。後世の変形部分もあるが、土塁の北西隅と南西隅は一段高く、当時の隅櫓のような建物があったのかもしれない。また、西側には大手門と土塁を切り通した通路があるが、伝承では堀に跳ね橋がかかっていたという。いつごろの伝承か定かではないが、大手門は中世以降の建物で、当時の面影を残しているようでもない。土塁の機能が集中しているようにみえる西側に対して、東側の土塁は南側へいくほど高さはなくなり、やがて土塁は消えてしまう。

土塁と一体をなす堀は、千曲川の氾濫原に接する南側になく、馬蹄形に東・北・西側を巡っている。その保存状態は東側と北側はおおむね良好で、原形をとどめているが、西側は道路敷で半分ほど失っている。現状の規模は、東堀が幅約10m、長さ約35m、北堀は幅約14m、長さ約72m、西堀は幅約10m、長さ54mを有す。

今回の調査は西堀に沿った既設道路の拡幅によ



第５図　内堀館略測図

るもので、調査範囲は狭く、ほとんどが堀の中であった。これでは堀の状態を把握することはできず、工事範囲外の試掘も必要であったが、実施には至らなかった。いずれにしても限られた範囲の調査であったが、いくつかの新事実が判明した。

その１は、Ａ区において堀の外側の壁が一部確認されたことである。壁にはテラス状に1.5mほどの張り出しがみられた。この側壁の延長線をたどると、堀の原形幅が推定でき、現在の既設道路と民家倉庫の一部が堀の中に入る。

その２は、Ｂ区の大手門通路であるが、現状は堀の形を失っていたが、地層状態から明らかにＡ区に続く堀が存在していた。堀の底は平坦な掘削と思われる。堀にかかる跳ね橋についてはその形跡さえ把握できなかった。

その３は、Ｃ区も現状は堀を失っていたが、地層状態から堀の存在が確認され、西堀を構成していたことがわかった。ただ、堀を満たしていた水は豊富な湧水であったが、その水をどこでせき止め、南側の氾濫原にどのように接続させていたのか、その形跡は不明である。

２　遺物

遺物はいずれも堀内の堆積層３層と３ｂ層から検出された。内耳土器片４点、中世土師皿１点、珠洲焼片２点、火輪１点であった。

１　中世土師皿（第６図１）Ａ区の壁際３層から出土した。口径11,3cm、器高3,4cm、胎土はにぶい黄橙色で金雲母粒を含む。回転台で成形され、底部に糸きり痕を残す。底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。

２　内耳土器の口縁部（第６図２）Ａ区３層から出土した。胎土は褐灰色、外側に炭化物が付着する。口縁部は平坦に切られ、内側に削られて狭くなる。口径は約21cmを有す。

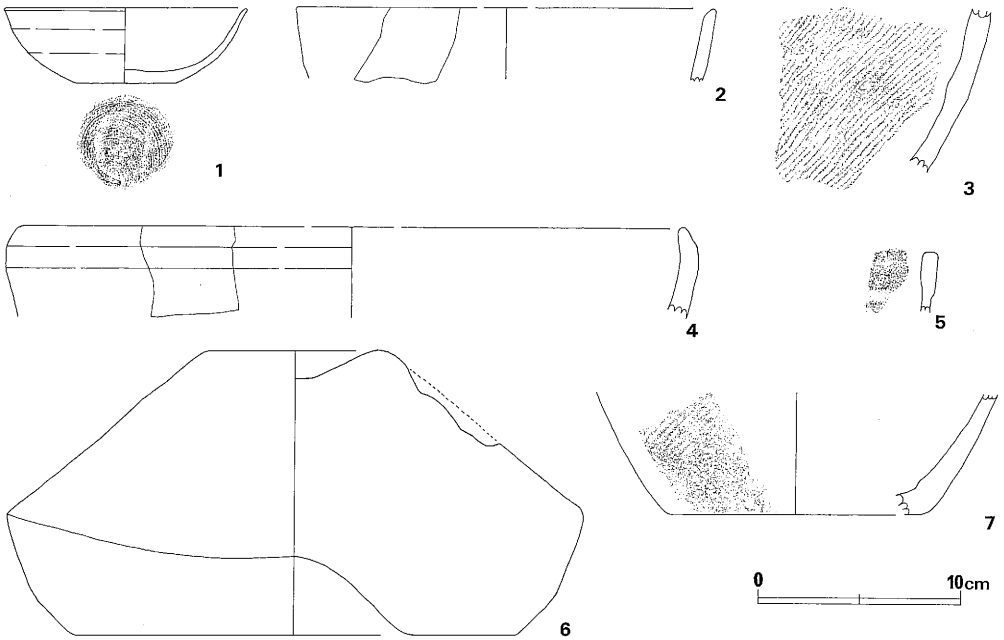
３　珠洲焼片（第６図３）Ｃ区３ｂ層から出土した。甕の胴部と思われる。

４　内耳土器片（第６図４）Ｂ区３層から出土した。胎土は黄褐色、口縁部内側に炭化物が付着する。口径は33cmを有す。

５　内耳土器の口縁部（第６図５）口縁部は平坦に切られ、胴部は口縁部に比べ薄くなる。

６　五輪塔の火輪（第６図６）Ａ区３層から出土した。器高は15cm、幅約31cmを有す。上面に約1,5cm、下面に約４cmのくぼみがある。

７　須恵器の底部（第６図７）Ｃ区３ｂ層から出土した。自然釉がかかり、胎土は暗赤灰色、砂粒を含む。



第６図　出土遺物

Ⅳ　むすび

1　内堀館に関する文献

内堀館の堀と土塁は1997年（平成９）に長野県史跡に指定された。大手門前の通路脇に次のような説明が記されている。「長野県史跡　内堀館跡(堀と土塁)」平成９年８月14日指定

上今井集落は千曲川の扇状地にあり、内堀館は集落の南部、扇端に当たる所にある。現在は臼井氏の宅地となっているが、名称のとおり堀が現存している。江戸時代後期に飯山藩の本陣として利用されていた。

外郭の存在は不明であるが、当館は堀敷を除いて規模は55m×60mほどの方形で、周囲に、高さ約５mの土塁と幅約10mの水堀を馬蹄形にめぐらしている。

外側を堀で取り囲み、内側に土塁を築いて防御を固め、その中に建物を配置するという中世貴族の典型的な屋敷地の景観をとどめている。

また、千曲川に面した部分に堀や土塁がなく開放されている。居館形態は、北信濃における館跡の地域的な特色を示す可能性があり、今後の研究材料としても重要である。

なお、県下の館跡にあって、その残存状況は良好であり貴重な史跡である。

『豊田村誌』1963年（昭和38）には「現状は西方から北方に土塁をめぐらし、土塁の外には堀を廻らしてあって、土塁の上と堀の外側に欅の大樹が森列しており、堀には水を湛えている。これ内堀の名の生じた原因であろう。これよりやや遠く離れた所にも所々欅の大木が見えるが古はそこ迄この屋敷で外堀があったそれで現在の堀を内堀というのであるとの話をした人もある。土塁も元は恐らく馬蹄形になっていたものであろう。(以下省略)」と記している。

『日本城郭体系』長野・山梨　新人物往来社刊1980年（昭和55）には、「上今井集落は千曲川沿岸の小扇状地上にあり、内堀館は、集落の南部、扇状地の扇端に当たる所にある。現在は臼井氏の宅地となっているが、名称のとおり堀が現存し、満々と水をたたえている。江戸時代後期に飯山藩の本陣として利用されたこともあって、よく保存されてきたものと思われる。

外郭の存在は不明であるが、当館は堀敷を除いて規模は55m×60mほどの方形で、周囲に、高さ約2.5m～３mの土塁と幅約10mの水堀とを馬蹄形にめぐらした館である。南方のみ防御が薄いが、恐らく当初は千曲川が館の直下を流れていたものであろう。

今井の地については、鎌倉時代末期の嘉暦四年（1329）の「鎌倉幕府下知状案」(「守矢文書」所有）に「太田庄内赤治（沼）郷豊後大夫判官、小玉郷地頭等、付同庄内野村上・今井」とあるのが初見であり、太田庄に属していたことがわかる。

従来の説では内堀館を新しい年代の構築とする考え方があるが、館構築の時期については今後の研究を必要としよう。なお、館の北方約120mの場所から、応仁元年（1467）の銘のある宝篋印塔が発見されている。」と述べている。

2　発掘調査の所見と問題点

前段で研究史的な意味を含めて、内堀館に関する三つの文献を引用したが、内容はいずれも大同小異である。基礎的な調査がまったくなされていないだけに、今回の調査は意義深い。以下、発掘調査の所見といくつかの問題点をまとめておきたい。

(1)全体測量図について

今回の調査で必要性が痛感されたことは、内堀館の正確な全体測量図であった。限られた調査期間の中で測量を試みたが、完成できなかった。館の建造物調査や民俗資料調査ともども、改めて実施する必要があろう。

(2)居館の構築年代について

今回の調査は主に堀の中であったが、水成堆積層から中世の遺物が発掘され、堀と土塁の構築年代が中世までさかのぼることを確認した。応仁元年銘のある既出の宝篋印塔と照合しても、室町時代を下らないと考えてもよいであろう。

⑶外郭の存在について

いわれているように、「内堀」の名称から「外堀」の存在が推測されている。外郭の調査については対象外で、その確認はしていない。今後の課題とされる。

⑷居館の形態について

今回の調査で堀の形態が失われていた西側に、明らかに堀が巡っていたことが確認された。したがって、内堀館は三方を水堀と土塁で囲み、中に建物を築くいわゆる馬蹄形の方形居館で、周辺の居館跡と共通する点が多い。いわれているように、北信濃の地域的特色かもしれない。それは居館の立地に由来していると考えられる。

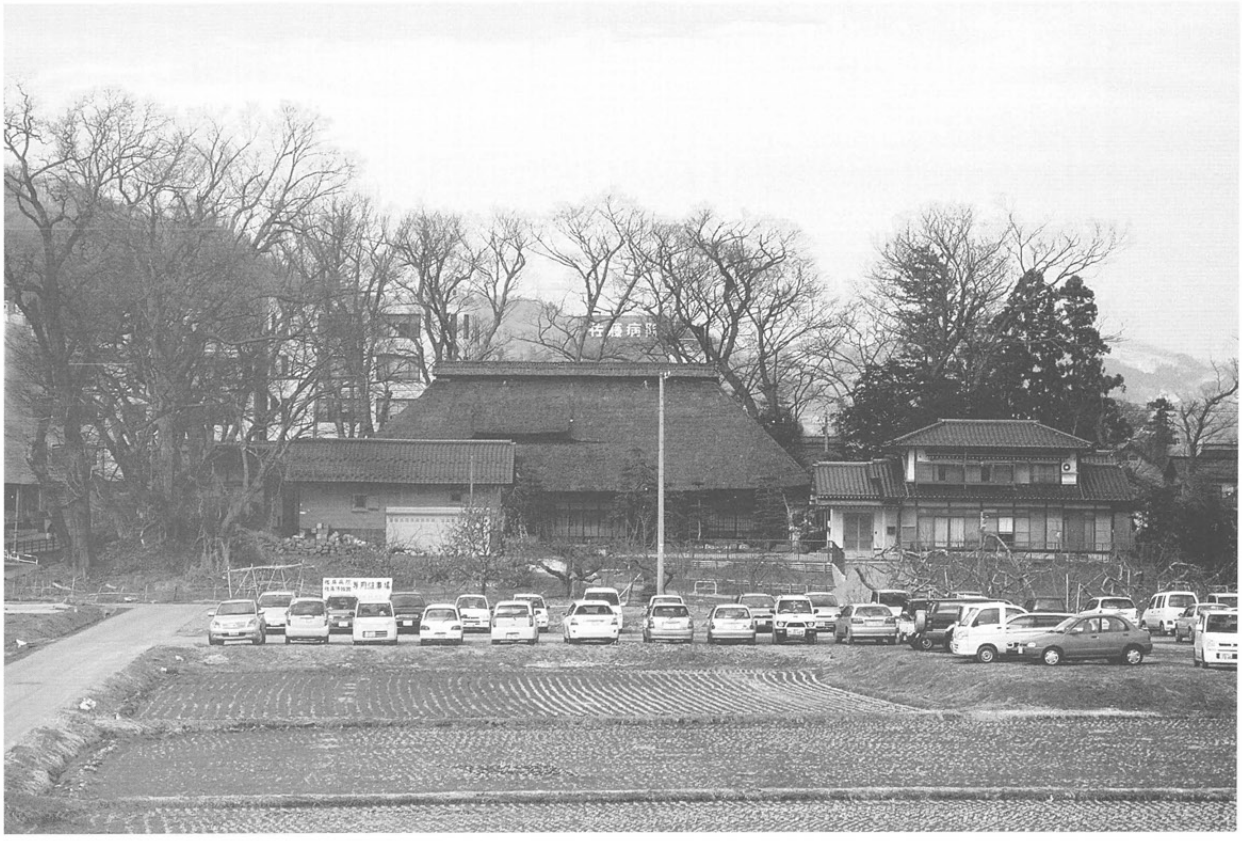
内堀館の場合、館の南側は千曲川の氾濫原に面し、この湿地が堀や土塁の代わりをしていたといえる。一説にいう「南方のみ防御が薄いので、恐らく当初は千曲川が館の直下を流れていたものであろう。」という推測は何の根拠もない。湿地であれば十分防御の機能がはたせたはずである。それにこの湿地は平常時には稲作の湿田として利用されていたであろう。同じく他の居館跡においても、湿地が重要な立地条件になっていたに違いない。

最後に、発掘に参加していただいた方々には雪がちらつく３月末の調査にもかかわらず、誠心誠意ご協力をたまわった。今回の調査が内堀館の研究にいささかでも貢献できたと自負している。

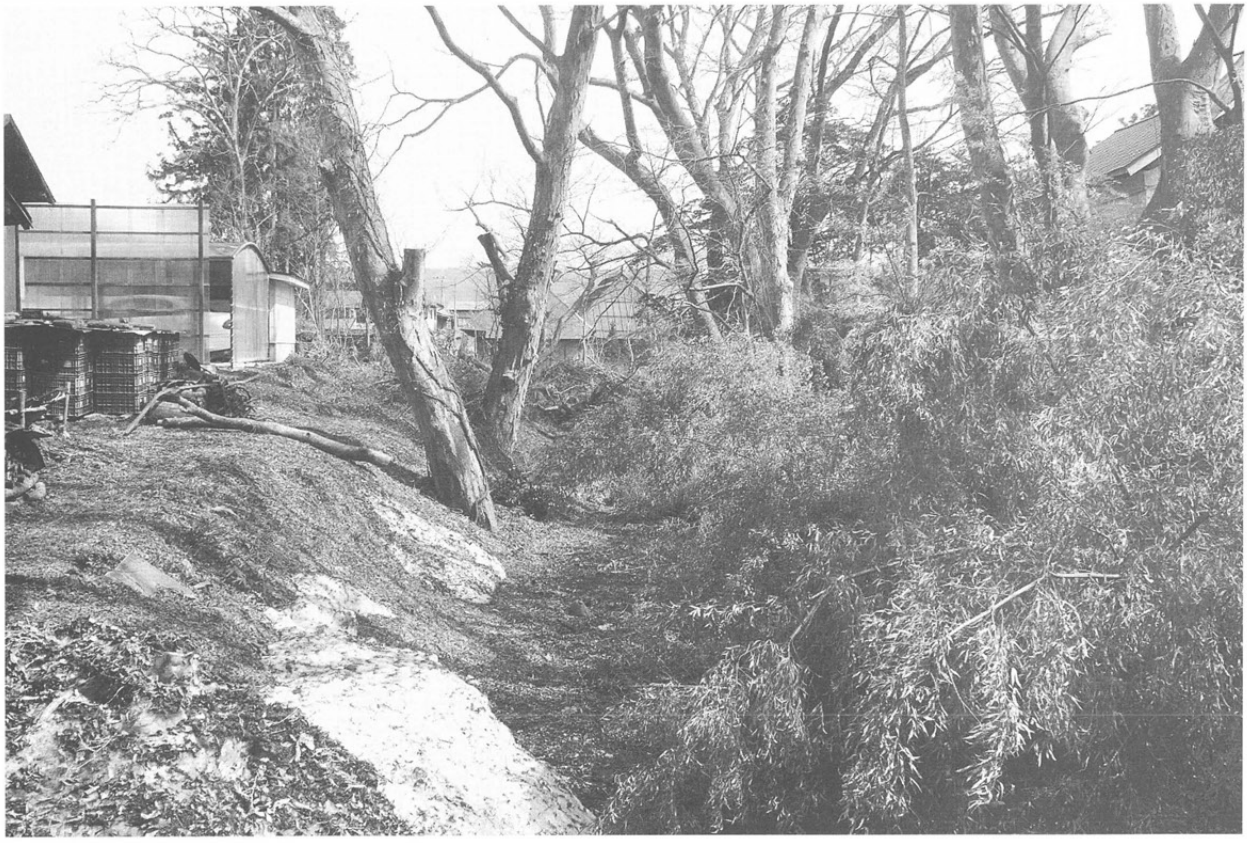
写 真 図 版

図版　1

1、内堀館遠景（東側から）



2、内堀館近景（南側から）



1、北側堀

2、東側堀

図版　3

1、西側堀

2、西側土塁（南側から）

1、A区地層断面

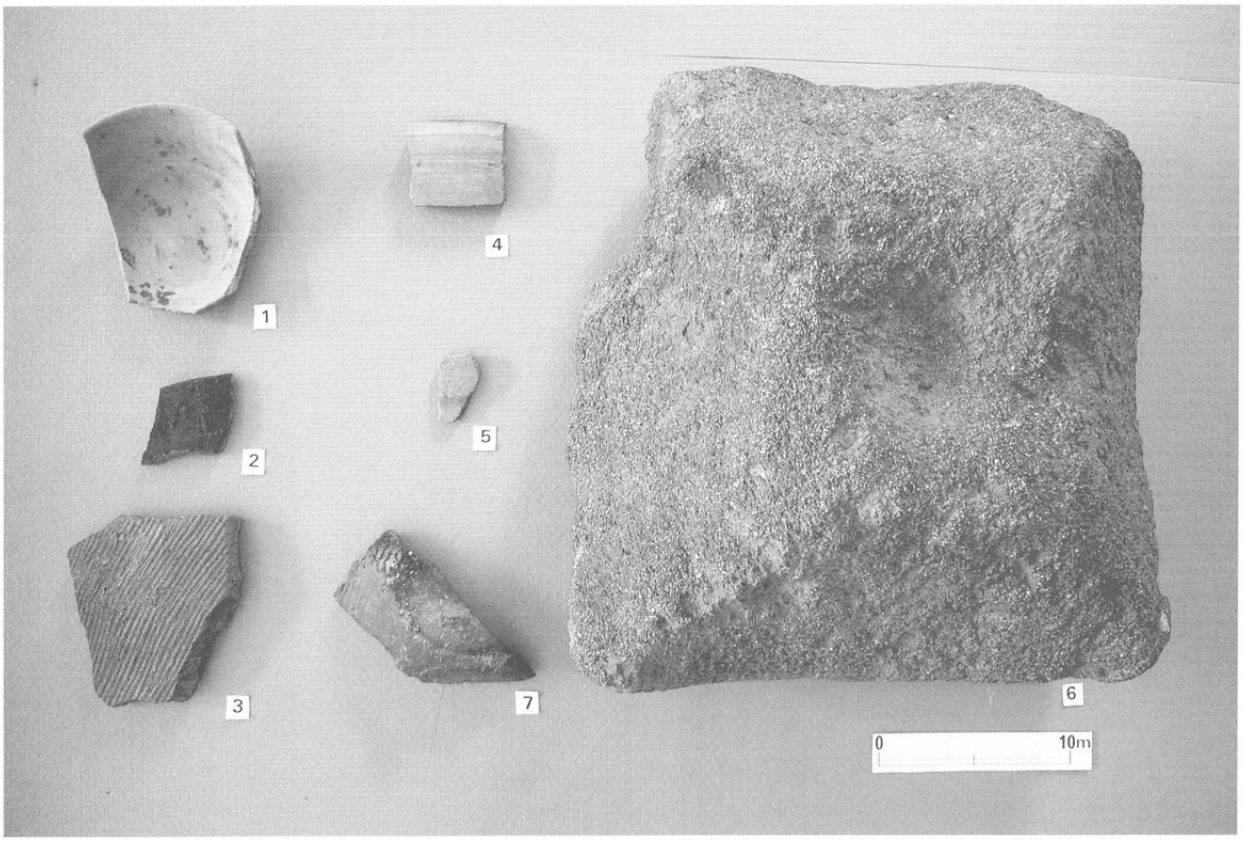
2、C区地層断面

図版　5

1、調査区範囲

2、中世土師皿出土状況

1、発掘風景（A地区）



2、出土遺物（Noは第6図と同じ）

内堀館発掘報告書抄録

書名	県史跡　内堀館西側堀の発掘調査
編集者	竹田保夫
編集機関	中野市教育委員会
所在地	〒381-8614　長野県中野市三好町１丁目３番19号　　tel 0269-22-2111
遺跡所在地	長野県中野市上今井字南山根633-３
遺跡市登録番号	№232
遺跡位置	緯度36°44′51″　経度138°19′21″
遺跡の標高	332～５メートル
調査期間	平成18年３月16日～３月30日
調査面積	102㎡
調査原因	道路改良工事に係る発掘調査
種別	居館跡
主な時代	中世
主な遺構	堀と土塁
主な遺物	中世土師皿・内耳土器
調査機関	㈳中野シルバー人材センター／埋蔵文化財発掘調査団

県史跡
内堀館西側堀の発掘調査

発 行 日　平成18年３月31日

発 行 者　中野市教育委員会
〒381-8614　中野市三好町１丁目３番19号
電話　0269－22－2111

印 刷 所　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012　長野市柳原2133－５
電話　026－244－0235